

九州支部中村様からの寄稿文を掲載します。

作者： Administrator
2022年 10月 31日(月曜日) 13:29 -

ジョージ・オーウェルから森崎和江+2

作家の森崎和江さんが2022年6月15日、亡くなった。95歳だった。植民地時代の朝鮮・大邱市生まれ。16歳、単身で九州に渡り、福岡県女子専門学校(現在の福岡女子大学)を卒業。詩人の谷川雁(1923～1995)、作家の上野英彦(1923～1987)と文芸誌「サークル村」を結成。ここから苦海浄土で知られる作家の石牟礼道子(1927～2018)も生まれた。炭鉱で働いた女性からの聞き書き「まっくら・三―書房」は、森崎さん、1961年の作品。



「女のほうが力がない」ということはなかすばしい。仕事はおなじことじゃ。『さんにぎりのおばさん』と姉名のついたおなごしゅうがありました。男でん持ちさん大石でも、その人は目より高う持ち上げますたい。体中から汗がふいて開いた股からながれおちますたい。そりゃ見事なもん。それだけでもおもしろそをみる。若い男でも、マブエコ(作業着)が短くはい。ぼとぼと落ちてくる汗をびっくりにして見ますたい。『何ばてれつと見とるるか』。というたかと思つたら、石をおろしてそのまま若い衆の前を力いっぱい握りますたい。それで男は息もでけんことなつて坑外へ這いでて、そこでぼつたり倒れてしまふとすばしい。だれでん風呂のなかで笑い話にしてはなしよつた。あのかんにぎりのおばさんいかなわんいうての。『まっくら』は、炭鉱の過酷な女性労働を伝えているが、どこか底抜けに明るい。

ジョージ・オーウェル(1903～1950)は、イギリス植民地時代にインド・ベンガルで生まれた作家。1歳でイギリスに帰国。奨学金を得てイートン・カレッジを卒業したが大学に進まず、旧ビルマで警察官になる。5年で退職、パリで貧乏生活を経験した後、イギリスに帰り、ルバカ・ジャーナルなどを発表。スペイン内戦では義勇軍に参加した。そのオーウェルが1936年1月末、イングランド北部の炭鉱町、ウィガン近くのリバカ・炭鉱に向かった。1929年の大恐慌後、イングランド北部の炭鉱の経営も危殆的な状況にあった。ローロツバ情勢も緊迫。1933年、ドイツでヒットラーが政権を握り、1936年、フランス・イギリスとの条約に反してラインランドに進駐。イタリアもエチオピアに侵攻する。その中で、オーウェルが「ウィガン渡辺への道・The Road to Wigan Pier」を書く。



「地下400ヤード(366m)まで立坑を昇降機で降りる。昇降機の下降速度は、たぶん60マイル(時速96km)。昇降機を降りた身長190cmのオーウェルが高さ4フィート(120cm)の坑道を進む。ロンドン橋からオックスフォード・サーカス(2.9マイル=4.2km)までにも匹敵する距離の坑道をはっていかなければならない。天井が4フィート以下になると、小びとが子ども以外にはだれにとってもやっかいな仕事になる。梁や桁があると、それを見て身をかわすために、体を二つに折り曲げるだけでなく、いつも頭を水平に保たなければならない。だから首の筋肉はたえず痙攣するが、それとて、ひさとももの痛みに比べれば問題にならない。半マイルも進んだら、その痛みは我慢できない苦痛となる。目的地に着けるかどうか不安になりはしめる。先はまだあるというのに、いったい降りはどうなるのか、足どりは遅くなる。200ヤードばかり天井が極端に低くなっているところまで来ると、しゃがみこんだ格好で前進を続けなければならない。梁の最後のところまで来て、もう一度立ち上がりうると、ひざが休みたいと訴える。ガイド(炭鉱夫)は同情的だ。私の筋肉が彼と同じでないことを知っている。『あとたった400ヤードだけだからね』と元気づけのつもりで言ってくれる。だが私には、まだ400ヤードと言ってくれたほうがピンとくる。しかしついに、はうような格好で切羽までたどりつく。ここまで1マイルの道のりだったが、ざつと1時間かかっている。炭鉱夫なら、おなじ道のりを20分ちよつとで歩いてしまふ。炭鉱夫は、地上に出てくると、わずかな水うがいをし、一番ひどい炭塵を喉と鼻から取り去り、それから帰宅するのだが、家で体を洗うかどうかは、その労働者の気質にだいた。たいていの炭鉱夫は、まず食事をとってから体を洗う。大きめのたらいに水を入れ最初に両方の手について胸、首、脇の下、それから前腕に行き手首、続いて顔と頭(炭塵が一番多くこびりつくのはこの顔だ)。次に彼の妻がネルのシャツを脱がし背中を洗ってくれる。彼は上半身しか洗っていないから、彼の頭にはまだ大量の炭塵が残っているだろう。立坑入り口の風呂を利用している炭鉱夫は、3人に1人の割合のようだ。私自身は炭鉱に入った後、まともな風呂に2回入浴しなければならなかった。炭鉱夫の住宅はスラムだった。2階建て連棟式の24軒の家は、地盤沈下で傾いていた。1階2階で4畳ずつ2部屋あったが、4つのベッドで、8人も生活していた。悪臭と鼠、南京虫の巢。共同トイレまで50ヤードも歩かなければならなかった。オーウェルは、ビルマを思い出しながら、東洋でもこれほどひどい住宅は無かったと回想している。ウィガンで公共住宅の建設は、ゆっくりと進み、オーウェルは、これで清潔好きの日本人のように風呂に入れると書いている。

+1は、現代イギリスのジャーナリスト、ジェームス・ブラッドワース(40歳)。ジェームスは、2018年「アマゾン」の倉庫で絶望し、ワーバーの事で発狂した。原題Hired:Six Months Undercover in Law-Wage Britain, James Bloodworth」を書いた。2社に、いずれも労働者として潜入取材。取材当時、イギリス国内にはアマゾンの倉庫(fulfillment center)が9カ所あり、内1カ所は、カノック・テイスというスタッフフォードシャーの旧炭鉱地帯ルージーリーにあると紹介している。



サッカー場10面ほどの広さがある巨大な倉庫で何時間もあいた、汗水流しながら倉庫内を上にと下にと歩き回った。10時間半のシフトの間あたりにランチ休憩がやってくる。従業員にとって短い休憩は一息つける貴重な時間だった。出入り口には空港と同じようなセキュリティ・ゲートが設置されており、携帯電話の持ち込みは禁止だった。フード付きの上着やサンダースも禁止。ほとんどの規則は「こそ泥」を防ぐためのものだった。50人程が巨大な金属探知機を通り、ポケットの中身のチェックを受けるのに10分から15分かかったが、その時間は無給だった。チェックの終わった従業員は我先にと食堂の奥に向かい数少ない熱々の人気メニューを手にする。東ヨーロッパのさまざまな国の言語が、光沢のある床の食堂で飛び交っていた。ルーマニア人は決まって食後のテーブルをきれいに片づけた。ランチには、30分の時間が割り当てられていたが、自由になるのは、半分程だった。約1200人の従業員がシフト勤務する。イギリス人は一人、なぜ、ここで働くのかと聞かれた。倉庫は4つのフロアに別れ、従業員も4つのグループに分かれていた。運ばれてきた商品を確認し開封するグループ、商品を棚に補充するグループ、注文された商品をピックアップするグループ、最後は商品を箱に詰めて発送するグループだ。私が担当した主な仕事は細長い道路を行き来して高さ2mの棚から商品を取り出し、トートと呼ばれる黄色いプラスチックの箱に入れることだった。トートは青い金属性の台車で運ばれ、長い長いベルトコンベアの上に置かれた。コンベアは、海に注ぐ小川のように建物の端から端まで流れていた。従業員一人当たり1シフトで40個のトートに本やDVDなどの商品を詰めた。従業員は、すべての動きを追跡できるハンドヘルド端末の携帯装置を義務付けられた。十数人の従業員を兼ねるライン・マネージャーがデスクのコンピュータから様々な指示を、この端末に送る。『ここ1時間、ペースが落ちていきます。スピードアップして下さい。』従業員は仕事の速さで上位から下位までランク付けされた。私は下位10%のグループだった。スピードが強いと懲罰ポイントになり、解雇される場合もある。一日10時間半、倉庫内を10.5km歩く労働で、週35時間働いた。私は派遣会社を退いて、ここに来た。約束は、週給が税引き前で245£(39,200円)、1£160円としていた。しかし、最初に支払われたのは、イギリス人の規制もあって185£。次の週は150£だった。ここには、かつて48もの炭鉱が集中していた。炭鉱跡には現在も社交クラブが残ると紹介し、かつての炭鉱マンにも話を聞いている。

写真は2015年に設置された慰霊の炭鉱夫像、亡くなった115人の名前を刻む(イングランド・ルージーリー)



【寄稿】九州支部 中村様からの寄稿 2022.10.31

作者： Administrator

2022年 10月 31日(月曜日) 13:29 -
